

教職に対する不安を抱く学生への支援例：
交換ノートを通じて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 純夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006855

教職に対する不安を抱く学生への支援例

— 交換ノートを通じて —

石田 純夫*

An example of a Support for Students who Feels Anxiety about Being a Teacher:

An Analysis Through the Exchange Note

Sumio ISHIDA

要 旨

本実践は、教員養成課程に在籍する学生106人の一人一人とノートを交換して、学生個々の教職に向けての迷いや不安を受け止め、支援していこうとしたものである。ノートでの交流を繰り返すことで、学生個々の本音を知ることができるようになり、個に応じた支援が可能となった。また、葛藤を紙面でぶつけながら、学生の気持ちにも前向きな変化が見られるようになった。

キーワード： 人間関係力 迷い 不安 葛藤 自己肯定感 自己否定感 安心感 交換ノート

1. 問題と実践目的

(1) 他者と適切な関係を樹立できない教師が増えた (学校現場における教師の実状)

「06年度の公立校病気休職7655人精神疾患は61%」という、文部科学省調査が公表された。11年間でほぼ3倍になったという。文科省は原因を「児童生徒や保護者との間のストレスが多い一方、職場の人間関係が弱くなり、それを十分には支援できていない。学校への要求が増える中、業務が複雑化し量が増えていることも影響している。」としている。

ここでは、原因の中での「児童生徒や保護者との間のストレスが多い一方、職場の人間関係が弱くなり、それを十分には支援できていない。」の部分に着目してみる。私自身が学校現場にいて教師の姿を見た時に、休職者以外にも職員や子ども・保護者との適切な関係を樹立できない教師が多い印象を持っている。もちろんそれは上記の原因からであると思うが、一方的な狭い見方をすれば、教師自身の社会性欠如や人間関係力の弱さに起因しているとも言える。

(2) 大学の積極的取り組みが期待される（教員養成段階での人間関係力養成）

そうだとすれば教員養成段階で、過去では重視しなかったこの課題への対応が当然必要になる。教職を目指す学生の実態を十分に把握した上で、学生個々を支援する場をつくり、人間関係のスキルを身につけさせることは大学の役割でもあると考えることができる。

(3) 学生の本音を支える（教員養成段階でまずできること）

教員志望の学生と接すると、表面上は積極的に志しているようでも、心の裏面には様々な迷いや葛藤があることに気付く。そして多くの学生が教職に対して不安感を強く抱いたり、人間関係に苦戦していたりするのが見えてくる。過去においてもそれは同様であったと思うが、より自己否定感が強まり対人関係に繊細になっているように思える。このまま教師になってよいのかと危惧してしまう。

ア. 自己否定感と教師への不安

自己肯定感を持っていないという学生が増えている。表面上は明るく振る舞っているようであっても、内面は自分に否定的である者が実に多い。多くのターゲットは教職であるようだが、実は自分への不安を訴えているのである。

しかし教師をめざすのであれば、そこを克服すべきである。自己受容の苦手な人間は他者受容もぎこちない。教師であれば人間関係もスムーズでなく、子どもが安心感を持ちにくい。

イ. 教職への迷い

家庭環境等から、教師という進路に対して何の疑問も感じずに大学の教員養成課程に入学し、はじめて迷いを抱く学生が多い。その多くは親の期待が背景にあり、「教職への強い意志はないが、他になりたい仕事もない。」というような感じで打算的になることも多いようだ。私自身にも同様の過去があり、彼らの気持ちに共感できる対象でありたいと思い、対話を大切にしている。

*静岡大学教育実践総合センター

中には、「教師にも魅力を感じるが、他にもやってみたいことがある。」と、夢をノートに伝えてくる学生がいる。こういう人間に教師になってほしいと思うが、そういう学生の数は残念ながら少ない。

ウ. 教員志望学生の気持ちを受容する

つまり「教員を志望しているのだから、年齢的にもそれなりの社会性や人間関係樹立力があって当然だ。」を前提に養成できなくなった。確かに大多数の学生それぞれに真面目な姿勢は強く感じられる。しかし反面、対人関係での柔軟性に乏しい。だからこそ教師としての人間関係を身につける必要があるのだが、それを学ぶ場は少ない。教育実習やアシスタント・ティーチャー等の経験は体験的に有効であると思われるが、限られた体験のみにとどまりがちであり、対人関係での葛藤を支援するまでに至らない。

このような状況下でまず必要なのは、教員志望学生の本音を知り葛藤を受け止める機会を保障することであると考える。個々の気持ちを受容することを丁寧に行いたい。

エ. 体験と大学授業の往還から葛藤を支える。

授業を通じて、何らかの手段で本音を知り葛藤を受け止めることができれば、その気持ちを共有する工夫をする。可能な限り学生個々に対話することである。そのためには、教育現場での体験活動が大切になる。体験を通して、自分と他者がどうであったかを振り返りながら話し合う。これを繰り返すことで、学生自身の中での葛藤がクリアされて、その繰り返しで教師としての力量が備わっていくと考える。

2. 実践

そこで、学生の教職への本音を受け止めるためにノート交換を行うことにした。時間的にどこまで実施できるかが不安であったが、ノートを交換すれば受講生全員とかかわりを持てると考えた。前期授業(約130人)から始め、後期も継続させることにした。

(1)対象学生：静岡大学教育学部2年生 教科専攻B組(国語、社会、音楽、美術、英語)

(2)授業名：生徒指導

(3)対象人数：106人

(4)実践のねらい

交換ノートを活用して、教職に対する気持ちを振り返り自問自答する機会を保障し支援することで、教職への視野を広げ強い意志を抱かせると共に、他者との人間関係を樹立する力をつけさせる。

(5)実践内容

ア. ノートの活用

最初の授業時に、学生個々へノートを1冊配った。ノートは授業終了後に各自が記入し、提出するようにした。次時までには教員が返事を書き、授業の最初に返

すようにし、これを繰り返した。ノートの内容は自由とし、授業と関係の無いことも記入可能であった。また、ノートの内容は秘密とした。

次第に多くの学生が本音を書くようになった。授業で扱ったことへのレスポンスを中心に、進路や恋愛、友人関係等自分自身の問題についての内容が多く、秘密レベルも高くなってきた。深刻な内容も増え、何回も読み直し返答する必要もでてきた。だからこそ、誠実に返事を書いた。量的にも多く書き、また学生の考えに対して積極的に主張をするようにした。赤ペンは使用せず、黒か青で記入した。

これによって、教師という職への気持ちについてもそれぞれが本音を伝えてくるようになった。また教育実習Iをきっかけに多くの学生が教職に対する自問自答をノートに記すようになり、個々の葛藤する様子がより鮮明にわかるようになってきた。

イ. 教職への気持ち

12月13日現在の106人のノートから、教職への気持ちを探ってみた。学生個々の気持ちも揺らいでおり分類が難しいが、下記のように類別した(表1)。

表1 教職への気持ち(ノートから)

教師になる気持ちがある	77人	迷いはない	27人
		迷いや不安が強い	44人
		他の進路も考えている	6人
教師になる気持ちがない	14人	教師に否定的である	5人
		他にやりたい事がある	7人
		その他	2人
将来についてノートに記入されていない			15人

表から次のような考察ができる。

○この中で、まず気になるのが「迷いはない」の27人である。この中には不安や迷いを克服していくタイプが半数以上であるが、例えば「子どもがかわいい」の認識にとどまっている学生がいることが気にかかる。

○「他の進路も考えている」「他にやりたい事がある」は主体的であり、今後教師を選択することもあるだろうし、そうでなくてもよい。

○意図的なかかわりを必要とするのが「迷いや不安が強い」「教師に対して否定的である」学生である。彼らは様々な理由で葛藤をしている。十分に受け止めた上で、彼らが多かれ少なかれ抱きがちな自己否定感への介入をすべきである。

○考えようでは、迷いや不安を感じている学生は、その葛藤を乗り越えることで力量を獲得できるかもしれない。かえって、不安を抱いていない者のほうが心配であるという見方もできる。

○「教師になる気持ちがない」は、そういう今と対峙してあげたい。自問自答をさせ、見守りたい。

ウ. ノートの内容から

ノートからは、授業や教育実習 I を通じて変化し葛藤する学生の様子が伺われる。紙面の都合で僅か 5 人のノートであるが追ってみる。

事例 1 : 教師になることを否定しつつ葛藤する A 子

10/11

私は教師になりたくありません。教育とかにあまり興味とかないけど、先生の話はなぜか好きです。

コメント：真っ白な気持ちで、子どもとふれ合ってみてください。「教育」という言葉をこえて、人をおもい、人を考えてみてくれたら教育実習も自分のためになる。

10/18

私の母は教師をしていて、様々な問題の話をいっぱい聞きます。そんな話を聞いていると人間関係の難しさとか難しい子とかがたくさんいて、いろんな問題がいっぱいあって、どうしてこんなに大変な仕事やるんだろうって思います。今は一番なりたくない職業です。すごく悩んで、この大学へやっぱり来るんじゃないかって思うことが多くあります。そんな風に人のためにがんばっているお母さんは私の誇りであるし尊敬しているけど、私はもっと自分のやりたい仕事をしたいです。

コメント：そういう自分の気持ちを抱いて教育実習へ行く価値は、すごくあると思う。難しい子は多いし、教師間の人間関係だってたいへんだ。でもそういう姿を自分自身で観察してくることに損はないさ。

10/25

教育実習、私は浜松小です。中学校よりは小学校のほうがましかなあと思っていたけど、子どもに話しかけられるか不安になってきました。なんか、附属の子ってやけに落ち着いたところがありそう……。やっぱり嫌だ、教育実習。

コメント：(実習が終わって) 子どもは全然おちついていなかったでしょう。子どもはみんな自由な感じだから。どうですか? 終わった後の感想は? 人生の変化はありましたか?

11/8

教育実習楽しかった。教師にいいイメージなかったけど「教師も悪くないな。」って思えた。授業をやったけど、自分が一生懸命考えた授業を子どもたちが楽しそうにやってくれて、それがとてもうれしかった。感動した。でも、それと教師になるかということは別物でやっぱり教師にはなりたいたとは思わなかった。でも、本当に教育実習は私の中で大きな出来事だった。子どもはすごいなって思った。

コメント：教育実習と教師とは別の引き出しに入れておくほうが得だ。教師になるための実習ではなく、自分の視野を広げるための実習であるべきだと思う。

OA子を振り返って

「教育には興味が無い」と書いていた A 子は、教職を希望するまでには至らないにせよ、教職や子どもへの気持ちが少しずつ変化しているように感じられる。教育実習や授業内容を自分に取り入れながら葛藤を繰り返し、自分で結論を出すであろう。親の姿を見ながら漠然と教師を視野に入れていた A 子の中に、教師を目指す確かな主体性が芽生えはじめているのだと思える。じっくりと関わり支えてあげたい。

事例 2 : 教師になるのをやめようかと思う B 子

11/8

教育実習、不安なまま行きました。4日間、ずっと緊張しっぱなしで、生徒、指導の先生に気がつかってもらいました。

授業を1時間だけやらせていただきましたが指導案の段階から上手くいかないことばかりで授業崩壊になりかけていたとまで言われました。今回は失敗だらけ反省することばかりでした。

でも、この実習 I では、失敗、反省ができただけでも大きな収穫だと思いました。先生って大変ですね。

コメント：うん、ちゃんと結論がでた。うまくいくはずがないんだ。「大きな収穫」と思う気持ちがすごいと思う。先生は大変だ。でも大変だけれど、「純」でいられる大変さかもしれない。

11/15

教育実習で驚いたことはたくさんあります。

- ・自分が「先生」と呼ばれること。
- ・生徒が元気よくあいさつしてくれること。

- ・合唱の練習を一生懸命していること。
- ・指導の先生が多忙だったこと。
- ・生徒の睡眠時間が1時間だったこと。
- ・生徒が「22時に寝るなんて早すぎるよ」と言ったこと。
- ・給食中、好きな女子の話をしている時に、学級委員長長のT君が「でもオレ、好きな子より家族より勉強が好きだから。」と言ったこと。
- ・女子が「公立よりマシでしょ。」と言っていたこと。などなど・・・。

なんだか、実習中はずっと演技していた気がする。「先生らしく、先生らしく」ってずっと考えていました。先生ってそんなものでしょうか？それでいいんでしょうか？

教師になるのをやめようか・・・と、最近考えます。

コメント：「先生らしく」は僕のきれいな言葉。僕が好きなのは「自分らしく」だ。大切な自分の将来、まだまだ迷う時間が多くあります。自問自答をたくさんしてください。このノートも活用してほしい。

OB子を振り返って

B子は、4日間の教育実習で教師への不安を強くした。B子のように、実習での子どもや教師の姿を見て教職への気持ちが揺らいだ学生は少なくない。しかし、視点を変えればこの葛藤は必要な経験であるとする。自分自身で不安を受け止め克服することこそ資質を身につける必要条件であり、そのステージが教育実習等での体験や大学の授業等だとすれば、学生の不安を受容し葛藤に伴走できる大学教員の包容力が必要である。

事例3：「人間が好きだから教師になる」という人間関係に繊細なC男

10/11

自分ってダメだなとか、よくかんじます。自分の不安を誰かが気づいてくれないかなといつも思っているきたない人間だなあって。でも人間は大好きなんです。だから、もっと人間というものを知りたいし、だからこそ、自分を好きになりたい。これから先生の毎回の授業・日記を楽しみにしています。

ちなみに僕は人間大好きなので、教師になりますよ。教育実習楽しみです。でも子どもはなかなか怖いです。

10/25

自分達が思っている以上に子どもは素直です。態度にすぐ出ます。つまらなさそうにしている時、楽しそうにしている時すぐにわかりますよね。教育実

習に行く事で、モチベーションが今すぐ上がっています。子どもに早く会いたい。不安はいっぱいだけどやってみよう。今自分がどこまでできるのか。実習帰ってきたら先生と話したいし、いろいろ聞きたいです。

コメント：素直だからこそ、「しゃらくさい」。本音を出されれば出されるほど、教師は困る。でもそれを受け止めるのが「やりがい」なのかもしれない。

実習、たくさん困ってきてください。

11/8

実習、楽しかったです。子どもって、かわいいです。しゃらくさい子もいたし。それがまた、かわいいんです。授業もやっただけど 難しかったです。子どもの意見から授業つくるのって、大変です。

コメント：ご苦労様。授業は難しいなりに、「キャッチボール」ができたのではないですか。小学校の先生のリーダーシップって、対等になれないから大変だと実感しています。どうですか？

12/13

自分が苦しい時に、誰かに助けてほしいことがある。何も無い時はいいんだけど、苦しい時って見てもらいたいんですよね。

だからいつも側にいてくれる存在は大きい。教師は生徒の近くにいつもいなきゃって思う肩書きとか地位とかじゃなくて、人間として「側にいるよ」って示せる人になりたい。先生は「先生の受け入れ態勢ができていけば子どもは寄ってくる。」って言ったけれど、その通りだと思う。無駄になってしまうこともあるけれど、教師は無言でやっていけば生徒に届く時もあるし届かない時もある。

一方通行でうまくいかない事あるが、無駄になることほどやりたいな。人間は人を信じてどんなに裏切られても、信じる事を忘れちゃいけない、信じる事をやめちゃいけないかなって思う。

コメント：教師は、自己満足を楽しむくらいの気持ちでよいのかとよく思うよ。「信じる」こと信じる前の作業として「疑う」という段階がある。疑うから信じることができるのかとも思う。疑うことも認めたいと思う。教師やってて疑うことと信じることと、裏切られることの繰り返しだったような気がする。

OC男を振り返って

C男には教師志望への迷いはない。おそらく人の気

持ちを大切にできる教師になるだろう。優しさがC男のモットーであり、子どももそれを受け入れるだろう。

心配なのは、自分への繊細さである。彼の純粋な教師観がどこまで学校現場で受け入れられるのか。教育実習や人との関わりの繰り返しの途中で今後ぶつかるであろう葛藤場面を大切にC男と対話していきたいと思っている。

事例4：「教育実習Iで自分の欠点に気づいた」というD子

11/8

教育実習から帰って来ました。この実習で自分の最大とも言える欠点に、気づいてしまいました。私は、自分の考えていること、思っていることを言葉で上手に選んで相手に伝えることができないようです。だからグループでの指導案づくりでは、他の2人とのコミュニケーションが上手にいかず、つらい思いをしました。帰りの会で話した時もよくわからないと言われ、落ち込みました。自分が教師としてやっていけるのかと不安を抱えています。

自分の欠点が見えたのだからそこを直せば、きっと私は教師になれる、という楽観的な考え方を持っていて、これからも教師を目指そうと思ったのですが、じゃあどうしたらこの欠点が直るのか、私は何をすればいいのかわかりません。

教師になりたい気持ちは変わっていないから教師を目指そう！！今はこの気持ちだけです。

コメント：気持ちがとてもよくわかるよ。おそらく、自分の考えを伝えることはできるのだけれど、考えすぎてごちなくなってしまうんだ。おそらく、この欠点は自然体で話すことで解消されると思う。心配ないさ。

12/6

今週の火曜日に学科の先生からそろそろゼミを考えなさいと言われました。私は小学校の先生になりたいので、教育学系のゼミに行きたいと思っています。そのゼミに行くと、教採を受けることはほぼ絶対だし、就職という道はないと思います。でも、全く迷いはありません。そんな感じで最近よく先のことを考えます。

コメント：強い気持ちにいつも感心します。目標に向けてつき進んでほしいと思います。〇〇さんには、不安や迷いを克服しようとするパワーをいつも感じます。いつでも相談に乗ります。何でもノートに書いてくださいね。

〇D子を振り返って

おそらく、どんな迷いがあってもD子は教員志望を変えないであろう。ノートの文面よりいつも感じることである。

D子は、教科専門について人より劣っていると不安を感じている。しかし、だから気持ちを後退させるのではなく、それをバネに教職を求めていく姿勢を崩さない。頼もしい限りである。このようなタイプの人物は教職についても自らを高めようとふんばる。今後も気持ちを受け止めていきたい。

事例5：中学校の教師に魅力を感じ始めたE子

11/29

私がこのノートを書き始めた時は、自分は絶対高校の先生になりたいと思っていました。そして静中に実習に行って、少し気持ちに変化ができて中学の教師をめざしてみようという気持ちが強くなりました。

実際に子どもたちと接して、様々な問題ある面も見ましたが、大変でも子どもたちと関わっていきたいと思うようになったのが大きいと思います。

私の周りの人たちで、教師になることをあきらめようとしている人がたくさんできてきました。私も不安はたくさんあります。まず体力ないし、きつい教師の仕事に耐えられるか・・・というのが最も心配だったりします。

でも今、体力をつけようとジムへ行ったりしてがんばっています。そうやって不安を少しずつ解決していけたらいいなと思っていますが全く不安がなくなることはないのかなと思っています。それでもやっぱり教師になりたいと思うし、今はできることをして、教師になった自分をイメージしてがんばりたいと思います。

コメント：すごいと思う。ノートを読んでいる僕もがんばらなければと思った。中学校に方向を変えたことについても、僕が中学校を中心にやってきたからか静中が母校だからからか、とてもうれしく思う。

子どもと大いに関わりやり甲斐を感じてほしい。

12/6

この授業は、私にとってすごく貴重な時間だったと思います。すごく子どもについて、教師について、そして何より自分について考えることができたからです。

教師って本当に「かかわり」の仕事だなと思います。先生が、いつも事例で話している子たちと先生は、すごく深いかかわりを持っているんだなと思

ます。これから教師になって本当にたくさんの子たちとかかわって、また他の先生など大勢の人とかかわっていくと思うと、なんかすごくわくわくしたような気持ちになってきました。

教師って、すごい仕事だと思います。こんなに「かかわり」のある仕事って、なかなか無いんじゃないかと思います。

コメント：ほんとうに、ノートからいつも勇気もらっている自分です。ありがとうございます。振り返って僕自身も教師でよかったと思います。

なぜって、いろいろな子どもや大人とかかわることができて、今もそれが自分を充実させてくれると思うからです。

○E子を振り返って

E子もたくましい。D子と同様に、不安をバネにする力がある。教職に就いても常に自己実現しようとするであろう。E子は母校の高校で講師をしている。その経験が静中での教育実習を生かしたのかもしれない。E子はこの授業が終わっても、このノートを続けたいと言っている。可能な限りかかわっていきたく思っている。

3. まとめ

(1) 迷い・不安にどのくらい寄り添えたか

ノートを通じて、どこまで学生個々の葛藤に伴走できたか。教職への迷いや不安に寄り添えたか。それを学生に確かめることはできにくい、個々の気持ちに変化が見られるようになったことは確認できる。

実際に106人のノートを読んでコメントする時間は、以前より多く必要になってきた。最初のページから読み直す必要があるからで、書くよりも読むことに時間をつかった。読み直してみると、多くの学生の「個の変化」を感じるからである。以前の内容との違いを感じとることができた。

勿論それは、教職への迷いや不安を解消できたという変化ではない。教師になろうとする学生が増えたということでもない。学校や子ども、教師について自己の問題として真摯に考えようとしている「変化」であると考える。

個の変化は、案外本人にはわからないようであり、だから変化を私なりに文字化し返してあげると、学生はあらためて自分の変化を認めるようになる。今後は、さらに気持ちを込め丁寧にノートと対峙したいと思う。

(2) 個別対話を増やしていきたい。

2007年度前期に、130人の2年生と同様のノート交流を実施した。後期受講の学生と違い教員志望の学生は限られていたが、自尊感情を持ってない学生

は後期学生より多かった。ノートの内容も次第に深刻に変化していくものが多く、1冊1冊、気持ちを引き締めて記入した。その結果、今でもノートを届ける学生が10人程度いる。また、時折研究室を訪れ自問自答をしていく学生も多く、一人一人の来室を大切にしている。訪れたりノートを届けたりする学生は、悩んでいるが主体的である。自分で自分を変えようとする意志がある。おそらく私という鏡を上手に使いながら自分の姿を見つけていくのだろう。

後期の学生にとっても同様である。授業の範囲でのノート交換は終了するが、前期と同様に、多くの学生が個別対話を求めてくることを願っている。

(3) 教員養成課程の責任

教職大学院設置や免許更新制の導入等、教員養成の在り方に関しての動きが激しい。教育への情熱を持ち、子どもや保護者に信頼される実践力のある教師育成が求められている。

だとすれば、教員養成課程の在り方も当然再確認されるべきである。教師を志す学生に何をどう教え、どう支えれば学生が実践的力を獲得するのか。急激な社会変化の中でみずからを失わず学校現場で活躍できる教師を育成できるのか。

教員養成課程に携わる者の姿勢と責任が問われている時である。